

近代日本の「実業」概念
—報徳運動の再検討の必要性—

A Study on the Concept of "Jitsugyo" in Modern Japan :
Necessity of Reexamination of "Hotoku" Movement

長 沼 秀 明
Hideaki Naganuma

抄 録 明治維新以後の日本の経済的發展において重要な役割を果たした「実業」の意味および役割について、「実業」概念の変遷を概観し、福澤諭吉および渋沢栄一の実業論を考察したうえで、「実業」としての農業に着目し、「実業」の地方的展開としての報徳運動の歴史的意義を再検討する。「実学」に裏づけられた「実業」という言葉が盛んに用いられた時期は日本資本主義の確立期とされる日清・日露戦間期とはほぼ一致しており、この時期、福澤諭吉は現実の日本の「実業」について大いに憂慮していた。

また、渋沢栄一が豪農層こそ「実業」の担い手であると明確に意識していたように「実業」には農業も含まれており、全国各地に開設された農業補習学校は地域の「実学」の発展に大きな役割を果たした。

報徳運動は「実業家」を支えた思想でもあり、殖産興業政策の地方的展開または地方における民業振興という側面を有していた。

キーワード 実学 practical science, 実業 business, 福澤諭吉 Fukuzawa Yukichi, 渋沢栄一 Shibusawa Eiich, 農業 agriculture, 報徳運動 Hotoku movement

はじめに	3. 2 資本主義を担った人々—農本主義と地方産業—
1. 辞書の定義にみる「実業」概念の変遷	3. 3 実業補習学校の役割
2. 福澤諭吉の「実業」観と現実社会	4. 「実業」の地方的展開としての報徳運動
2. 1 明治維新と洋学・実学	4. 1 報徳運動に対する従来の見方
2. 2 『実業論』にみる産業革命前夜の日本社会	4. 2 報徳運動の特色
2. 3 日清戦争後の「実業」の現実	4. 3 報徳運動とは
3. 「実業」としての農業	おわりに
3. 1 渋沢栄一の「実業」思想	

はじめに

近代の日本社会において「実学」は、はたして、どのような役割を果たしたのであろうか。本稿は、大日本報徳社の本部が置かれ、報徳運動の中心地となった掛川という町をとりあげ、「実業」という概念について検討を加えることをつうじて、近代日本における「実学」の役割について考えることを目的とする。

はじめに「実学」と「実業」との関係について、ふれておく。まず「実学」とは一般に、習得した知識や技術がそのまま社会生活に役立つような学問をさすことばであるとされているようである。また「実業」とは、農業・工業・商業の上位概念として、明治時代以降に使われるようになったことばだと考えられる³¹⁾。岩倉使節団の公式報告書である『米欧回覧実記』は、「実業」ということばの、かなり早い時期の使用例だと思われる³²⁾。

ここで重要なことは、明治32年(1899年)に制定された実業学校令の規定に見られるように、「実業」には「農業」も含まれるとされていたという点である。この点に関連して、「実業家」という概念は実はきわめて曖昧なものであるという土屋喬雄の指摘³³⁾は、後に詳しく考察するように、きわめて重要なもの

であるといえるだろう。近代日本の「実学」について考察する際に最も重要な人物であるといつてよい福澤諭吉の「実業」観については後に詳しく考察するが、いずれにせよ「実業」とは「実学」の応用であり、「実学」は「実業」を支えるものであるという関係は見取れるかと思われる。したがって、近代日本における「実学」の役割を追究するうえで、「実業」概念について考察を加えることはきわめて有効ではないかと考える。

1. 辞書の定義にみる「実業」概念の変遷

そこで次に、明治時代の「実業」概念の変遷を概観しておこう。

たとえば『讀賣新聞』紙上に「実業」ということばが出てくる記事の数を調べてみると、たいへん重要な結果が現れてくる【表1】。明治十年代の後半ごろから紙面に登場する「実業」ということばは、明治二十年代に入ると年を追って増加し、日清戦争が終結した明治28年以降にはさらに増加を見せる。そして、その傾向は明治三十年代前半まで続く。このことは、「実業」ということばが盛んに用いられた時期が、日本資本主義の確立期とされる、いわゆる日清・日露戦間期と一致し

表1 『讀賣新聞』紙上の「実業」記事数(本文に「実業」の語があるもの)

明治 7~10年	0件	明治 31~40年	1299件
11~20年	21件 (ほとんどは17年以降)	うち 31~35年	919件
21~30年	613件	31年	202件
うち 21~25年	119件	32年	359件
26年	53件	33年	71件
27年	62件	34年	91件
28年	121件	35年	196件
29年	105件	36~40年	380件 (36年は61件)
30年	153件		

(『明治の讀賣新聞』CD-ROMにより調査・作成)

ていることを示すものであり、きわめて注目される。

このような「実業」をめぐる社会状況の変化は当然のことながら、さまざまな辞典類に示された「実業」の定義にも反映しているといえる【表2】。新聞記事と同じように、「実業」ということばは日清戦争後に頻繁に辞書に登場するようになり、その意味は英語の industry さらには business ということばと関連づけて説明されていくようになる。しかし、ここで決して見落としてはならないことは、「実業」という概念には明らかに農業という意味が含まれていたという事実である。そして、このことは、実践を旨とする当時の「実学」の意味を考える場合にも、たいへん重要な点であろうと思う。

2. 福澤諭吉の「実業」観と現実社会

2.1 明治維新と洋学・実学

明治維新は言うまでもなく、世界資本主義の圧力を対外的な要因として起こった一大変革である³⁴⁾。そして、明治期の日本社会は資本主義の形成に向けて大きな転換をとげていくことになった。幕末の日本に開国を迫った西洋国際社会の圧力を生み出したものは、ほかならぬ産業革命であり、それは政治・経済・文化など、社会のすべての領域に浸透する巨大なエネルギーの源であった。そのような産業革命を経た西洋諸国と、幕末維新期の日本社会との間には、決定的な工業力さらには軍事力の差が存在したが、同時に、当時の日本社会は、そのような圧倒的な力をもつ西洋文明を自らの目標として考えることのできる環境もすでに整っていた。

福澤諭吉は、そのような時代状況のなかで

日本の独立を達成するためには、西洋文明を模範とし、日本が文明国になることが必要であることを説き続けた。そして、そのためには、洋学をつうじて西洋の市民文化を日本に移植させることが必要であるとして、そのための努力を傾けた。福澤が考える文明開化と殖産興業との関係について藤森三男が、福澤が「実業」をまさに国事としてとらえ、国事としての殖産興業すなわち「実業」は日本社会の文明化のために必要不可欠であると考えていたと指摘している³⁵⁾ことは、きわめて重要である。

このような福澤の認識は、日清戦争開戦の前年にあたる明治26年(1893年)に執筆した『実業論』という論説において、さらなる展開を見せる。

2.2 『実業論』にみる産業革命前夜の日本社会

福澤の『実業論』は、明治26年に『時事新報』の「社説」欄に連載され、ただちに博文館から単行本として出版された作品である。福澤は、まず「実業革命の期近くに在る」と述べ、日本が産業革命の時代に入りつつあるという認識を示す³⁶⁾。しかし同時に、日本は開国して「西洋の文物を輸入」し、学問と政治の「革命」は実現したものの「実業社会は依然たる鎖国の蟄居主義」に安んじているとして、未だ「実業」の「革命」がなされていないと厳しく指摘する。また、その理由として、実業社会には人物が少ないこと、および実業社会には「国中最上の智識」が応用されていないことをあげる。そして、実業を文明化するためには「教育を経たる学者」すなわち「文明士人」を登用することが必要である

表2 明治期の辞典類に見る「実業」「実業家」の定義（付 「実学」の定義）

「実業」	「実業家」
大槻文彦『言海』（明治24＝1891年） 「農、工、商ナド、実地ニ行フ事業。(学問理論ノ業ナドニ対ス)」 山田美妙編『日本大辞書』（明法堂、明治26＝1893年） 「漢語。理論デナク実地ニ行フ事業。農、工、商ノ類」 物集高見編『日本大辞林』（宮内省、明治27＝1894年） 「まことのなりはひ」 大和田建樹編『日本大辞典』（博文館、明治29＝1896年） 「実地に行ふ殖産工商等の事業」 エフ・プリングリー、南条文雄ほか編『和英大辞典』（三省堂、明治29年） 「Industrial occupation; trade」 「Jitsugyo ni ju ji su, 実業ニ従事ス、to engage in industry」 棚橋一郎・林麿共編『日本新辞林』（三省堂、明治30＝1897年） 「理論のみならずして、実地に行ふ事業、農、工、商ノ類」 落合直文『ことばの泉』（大倉書店、明治31＝1898年） 「農、工、商など実地に行ふなりはひ」 伊東洋二郎編『高等国語読本字解』（教育書房、明治34＝1901年） 「自分ガ手ヲ下シテスルコト」	高橋五郎『漢英対照いろは辞典』（長尾景弼刊、明治21＝1888年） 「かたきわざする人（やましに反す）。A practical person」 エフ・プリングリー、南条文雄ほか編、前掲『和英大辞典』（明治29＝1896年） 「One who is engaged in industry」 井上十吉編、前掲『新訳和英辞典』（明治42＝1909年） 「a man of business; a business-man」 金沢庄三郎編、前掲『辞林』（明治44＝1911年） 「経済的事業にたづさはる人」 山田美妙、前掲『大辞典』（明治45＝1912年） 「実業ヲ職トスル人」 （『明治のこぼ辞典』、201ページ）
山田美妙『新編漢語辞林（一名熟語六万六千語辞典）』（青木嵩山堂、明治37＝1904年） 「セイザウ、シャウゲフ、ソノ他ノジゲフナドノトナヘ」 森下松衛『訂増中等作文辞典』（明治書院、明治38＝1905年） 「実際になす業」 稲垣乙丙『農家節用 農業辞典』（博文館、明治39＝1906年） 「普通ニ実業ト称スルハ農業、工業、商業、鉱業、水産業ナドノ生産業ナリ」 酒生慧眼監修『熟語新辞典』（精華堂、明治40＝1907年） 「理論のみならずして実地に行ふ事業。農工商ノ類」 松村吉則・後藤市蔵『和英商業法律経済術語辞典』（研商会、明治41＝1908年） 「Business」 井上十吉編『新訳和英辞典』（三省堂、明治42＝1909年） 「①〔実務、商業〕Business。 ②〔商工業〕Industry. 身を実業に投じた。He has entered into business.」 志田義秀・佐伯常磨共編『日本類語大辞典』（晴光堂、明治42＝1909年） 「まじめに働くしごと、正業、農工商などの実地のなりはひ（生業）」 金沢庄三郎編『辞林』（三省堂書店、明治44＝1911年） 「①実地に行ふ業務。実際になすわざ。 ②農業・工業・商業等の如き経済的事業の特称」 神田乃武・横井時敬ら十二名編『模範英和辞典』（三省堂、明治44年） 「Industry」 山田美妙『大辞典』上（嵩山堂、明治45＝1912年） 「スベテ、実地ノ有形的、又ハ物質的ノ事業。農、工、商ナド」 芳賀矢一『新式辞典』（大倉書店、大正元＝1912年） 「農業工業商業などの経済的事業、——家」 柴田猛猪・近藤久吉『ローマ字索引 国漢辞典』（啓成社、大正4＝1915年） 「実際のな事業（農工商）」 上田万年『ローマ字びき国語辞典』（富山房、大正4年） 「生産、製造、運輸等に関する殖産興業の事業、農工商等の実地の生業、Industry」 「実業家」「実業界」 （『明治のこぼ辞典』200～201ページによる。下線は引用者〔以下同〕）	「実学」 萩原乙彦編『音訓 新聞字引』（東生亀治郎刊、明治9＝1876年） 「マコトノマナビ」 奥川留吉編『改正小学読本字解』（内藤伝右衛門刊、明治9年） 「ホントウノガクモン」 並河尚鑑編『小学読本解語』（沢宗次郎刊、明治9年） 「ジツチノガクモン」 加藤栄太郎編『和漢修身訓字引』（江南有美堂、明治15＝1882年） 「マコトノガクモン」 山田季編『小学修身書字引』下巻（山中市兵衛刊、明治16＝1883年） 「マコトノガクモン」 清水常太郎『实用漢語活益字典』（大谷津逮堂、明治25＝1892年） 「マコトノガクモン」 荒川義泰『熟字以呂波引 漢語大字典』（青木嵩山堂、明治25年） 「実用ノ学問」 山田美妙、前掲『新編漢語辞林』（明治37＝1904年） 「ジツチノガクモン」 金沢庄三郎編、前掲『辞林』（明治44＝1911年） 「①実際の役に立つ学問。②実際にこれを自分の身に行ふ学問」 山田美妙、前掲『大辞典』（明治45＝1912年） 「スベテ、実用ニナル学問」 芳賀矢一『新式辞典』（大正元＝1912年） 「①実際の役に立つ学問。②実用の学。③實際之を自身の身に行ふ学問。実践の学」 （『明治のこぼ辞典』、200ページ）

と説くのである。つまり福澤は「実業」の文明化のためには洋学にもとづく知識が不可欠であると考えていたのである。

このような福澤の認識の根底には、世界資本主義の具体化としての外国との貿易のあり方を厳しく見据える目があった。彼は、当時の日本が紡績業の分野において急速な「進歩発達」をとげていることに着目して、いわゆる貿易立国論を展開する。そして、工業が盛んになれば、やがて商業も発展し、日本は西洋との競争が可能なる「実業国」となりうるに違いないと述べ、徹底した自由貿易主義を唱えるのである。なお、この『実業論』の中で福澤が、工業や商業を支えるべき農業について直接に言及していないことは注目されることであるが、この点についての検討は今後の課題としたい。

「実学」という観点から、この『実業論』を読んだ場合に最も着目すべきことは、福澤が「実業の発達と共に器械の用法も亦盛なるべきは論を俟たず」として、器械や電気など技術の発展が、すなわち「実業」の発展につながることを鋭く見抜いていた点だと思ふ^{註7}。福澤論吉は「日本の実業に文明の要素を注ぐための学問は「深くして狭きよりも寧ろ浅くして広きを貴しとす」と述べたが、彼はさまざまな学問分野を総合した「実学」こそが「実業」の発展を支えるのだと考えたということになるであろう。

2. 3 日清戦争後の「実業」の現実

それでは当時の現実の日本社会において、福澤の「実業」への期待は、はたして実現されたのだろうか。たしかに『実業論』執筆の2年後、すなわち日清戦争終結の明治28年

(1895年)には「帝国実業の発展振興を図る」^{註8}「学術普及の機関」として大日本実業学会が創設され^{註9}、その2年後の明治30年(1897年)には実業之日本社から「実際問題攻究の機関」として『実業之日本』が創刊された。時代は、まさに「台風のような産業革命の時代であり^{註9}、当時の日本社会は「実業の天下」といわれるような状況を呈していた^{註10}。日清戦争後に三井や岩崎そして渋沢栄一が男爵となって華族に列せられたことは、その象徴といえるだろう。しかしながら、先に見たように『実業論』で洋学知識人たちへの期待を語った福澤論吉は、それから4年後の明治30年に刊行された『福翁百話』に収められた「実学の必要」という文章のなかでは「今の実業家など称する商人輩が、無学無識にして」と、たいへん厳しい表現を用いて現実の日本の「実業」について大いに憂慮している^{註11}。尾崎紅葉のベストセラー『金色夜叉』が『讀賣新聞』紙上に長期にわたって連載されたのは、まさに、このような時代のことであった。また、内田魯庵は明治35年(1902年)に刊行された『社会百面相』に収められた「青年実業家」という作品のなかで、福澤論吉が期待した「文明流のビジネスマン」からはほど遠い日本の「実業」の現実と、「実業」を支えるべき「実学」の現状とを厳しく批判する^{註12}。ここには「実業」と「実学」との乖離という現象が見てとれるように思われる。

3. 「実業」としての農業

3. 1 渋沢栄一の「実業」思想

ところで、当時の日本社会を見た場合、多くの「実業家」たちが武士階級または豪農の出身者であったという事実は、きわめて重要

だと思う。そこで、つぎに、豪農出身の「実業家」である渋沢栄一の「実業」思想を見ておくことにしよう。

渋沢は、水戸学を中心とする、実践を旨とする儒学を学問的基盤として民間で活躍した「実業家」であるといわれる。渋沢さらには明治期の啓蒙思想家を考えるうえで重要なことは、長幸男氏が指摘しているように、江戸時代に培われた、いわば儒教倫理を彼らがどのようにして近代的な市民道徳として蘇らせようとしたかという視点¹³をもつことではないかと考える。この視点はすなわち、日本の在来の学問や思想に、洋学がどのように接合したのかという問題にほかならない。

この問題を渋沢栄一の場合について当てはめて考えた場合、最も示唆を与えてくれるのは、彼が大正12年（1923年）に帝国発明協会で演説した「道徳経済合一説」¹⁴であろうと思われる。彼は、この説を「論語主義」と呼び「仁義道徳と生産利殖とは、元来ともに進むべきもの」「まったく合体するもの」であることを強調したうえで、アダム・スミスの名をあげて「利義合一は、東西両洋に通ずる不易の原理である」と述べ、儒教倫理と西洋の市民道徳とは見事に合致すると主張しているのである。ここには、少なくとも渋沢自身にとっては従来の日本の思想と洋学知識とが矛盾なく融合していることを見てとることができる。なお、渋沢が、この演説のなかで「国を富ますは、科学を進めて、商工業の活動によらねばならぬ」と明快に述べ、「実業」を支えるのは「実学」である、「実学」こそが「実業」の源となるという認識を示していることはきわめて注目される。

渋沢は、自らが豪農層の出身であったとい

うこともあり、西洋列強の脅威に対抗して日本の国富を増大するためには、豪農層こそが大きな役割をはたさなければならないと考えていたといえるだろう。農民出身であることを誇りとした渋沢が、自らをも含む豪農出身者こそが実業家の予備軍であると強く認識していたという坂本慎一の指摘を参考にするならば、渋沢は、幕末以来の対外的危機に対応して明治維新という一大変革の原動力となったのは、武士階級すなわち士族ではなく、自らを含む「田舎紳士」たちであると考え、この「田舎紳士」すなわち豪農層こそが「実業」の真の担い手であると明確に意識していたといえよう。

3. 2 資本主義を担った人々—農本主義と地方産業—

そして実際に、豪農層の出身者たちは、各地で産業の発展に大いに貢献し、渋沢の期待に応えていくことになった。たとえば、福澤諭吉の慶應義塾に学び、その後、カネボウの創業に尽力した武藤山治は、大正15年（1926年）に刊行した『実業読本』¹⁵のなかで「実業家」の倫理を説いたが、彼が考える「実業」とは、たんに商工業のみではなく、生活または利益を目的とするすべての仕事を意味していた。彼のこのような「実業」観は、彼が農村出身者であることと決して無縁ではないだろう。

武藤山治のような、地方の、いわば農本主義的な思想が、どのように地方の産業を起こして地方の「近代化」に貢献したのかという問題は、近代日本の「実業」および「実学」を考える場合の重要な論点になると考える。地域社会に生きた「実業家」が地域の殖産開

発にどのようにたずさわったのか、そして「実学」や洋学が「実業」の発展をどのように支えたのかという問いは、きわめて興味深い、そして重要な問いだといえるだろう。一例として、神奈川県で活躍した福井直吉という人物をあげよう。彼は、自由民権運動—国会議員—実業家という人生を歩んだが¹⁶、彼の生涯を見れば、彼の行動はいったいどのような思想に貫かれ、その思想を形成した学問とは、はたしてどのようなものだったのであろうかという疑問が湧いてくる。福井の検討は今後の課題とせざるを得ないが、日本の各地で展開された、このような「実業」の実態を「実学」および洋学という観点から再び問い直してみることは、きわめて意味のあることであると考えられる。

3. 3 実業補習学校の役割

さらに、この時期の地域の「実業」を考える際に見落としてならないことは、実業補習学校が地域の「実学」の発展に果たした役割である。実業補習学校は、明治25年（1892年）に井上毅が「各地方の状況に応じて其の地方の実業に関する科目を選定」して教育するという構想を提示して翌26年に実業補習学校規程が制定され、「科学及技術と実業と」を「一致配合する」教育を地域で実践する場所となった¹⁷。明治27年（1894年）に出版された『実業補習教育論』¹⁸には、「実業」に「学理の応用を要すべき」側面が多くなったという当時の時代状況をふまえ「科学を応用して農工商業の進歩を促す」こと、および実業補習教育が地域の「生業の助」となることが期待されている。そして、そのような地域社会の大きな期待を担って、全国各地に農業補

習学校が次々と開設されていった【表3】。やはり、当時の日本社会の「実業」の中心は、ほかならぬ農業であったのだ。日清・日露戦間期にあたる明治32年（1899年）に制定された実業学校令の規定にも、当然のことながら農業が含まれている¹⁹。

表3 農業補習学校の急激な増加

明治28=1895年	26校
明治34=1901年	123校
明治36=1903年	1121校
明治38=1905年	2450校
明治40=1907年	4407校

（『日本近代教育百年史』第9巻、75～76ページによる）

4. 「実業」の地方的展開としての報徳運動

4. 1 報徳運動に対する従来の見方

それでは、以上に見てきたような時代背景をふまえて、静岡県掛川地域を中心にして日本全国に展開された報徳運動を見つめてみると、いったいどのような側面が見えてくるであろうか。

これまでの研究のなかで報徳運動は、日露戦争後の地方改良運動の精神的支柱としての報徳主義にもとづく、国民の勤儉自助努力と相互扶助とをめざす運動として理解されることが多かったといえる。しかしながら、このような理解は、いわば国家の側からの論理を中心とした解釈である。農民の側からの、報徳運動自体に内在する論理を明らかにするという作業は、これまで必ずしも十分ではなかったように思われる。

4. 2 報徳運動の特色

ここで注目したいのは、報徳思想が「実業

家」を支えた思想でもあったという事実である。大原孫三郎や御木本幸吉、豊田佐吉をはじめ今日に至るまで、報徳思想は「実業」と密接な関連を有しているといえる^{注20}。また、報徳運動は日本の協同組合の先駆的形態であるという指摘もなされている^{注21}。

報徳社は、幕末期に遠州地方で農民たちによって自主的に結成されて以後、全国的に普及し、広範な民衆運動として発展した。「報徳」とは、人それぞれ固有の「徳」（すなわち長所）を引き出して社会に役立てることを意味する概念であり、明治8年（1875年）に結成された遠江国報国社の社長であった岡田良一郎は「富国安民」の理念のもと、二宮尊徳の唱えた「自得」の精神を重視し、地主・豪農として地方政治や国政に従事し、報徳主義にもとづく政治の実現をめざした^{注22}。そして、このような報徳思想・報徳運動は、日本の在来思想に立脚し、当時の日本の農村の現実と合致した日本の近代化をめざすものであったとされている^{注23}。

そして、この報徳運動が、殖産興業政策の地方的展開または地方における民業振興という側面を有していたことは、きわめて重要である。掛川の場合、明治十年代後半、激しい農民層分解という状況のなかで、貧困にさらされていた一般農民を前にして豪農（在村地主）たちには、このような困難な状況に陥った地域社会をいかに再生するののかという大きな課題が突き付けられていた^{注24}。そのような課題を克服するために、報徳主義は、農本主義的生産力を追求して殖産興業を図り、かつ農民の日常生活の倫理を確立するうえで、きわめて大きな役割をはたしたといえることができる。

4. 3 報徳運動とは

従来の研究では、この報徳運動は寄生地主制確立という歴史的展開過程のなかで、その役割を大きく変えてしまったとされている。たしかに、そのような側面があることは認めざるを得ないかもしれない。しかしながら、そのような理解だけでは、少なくとも掛川地域の「実業」の発展を十分に説明しえないと考える。明治二十年代の経済発展のなかで掛川農学社が引き続き果たした役割は無視し得ないし、日清・日露戦間期を含む明治二十年代から三十年代にかけての稲作・製茶・生糸などの農事改良を、たんに地主層たちの側からのみ説明することは、必ずしも地域社会の実状を正しく把握したものとは思われない^{注25}。

掛川地域における農事改良の実態とは、いったいどのようなものであったのか、なぜ、この時期に農会や産業組合の組織化が進められたのか、そして一般農民は、はたして地主たちの「犠牲者」だったのか、農業補習学校を中心とする農業教育の役割はどのようなものであったのか等々、解明しなければならない問題は、未だ山積しているように思われる^{注26}。

おわりに

幸い、掛川には岡田家文書をはじめとする大日本報徳社の関係史料が多数存在している^{注27}。今後、実学史・洋学史の観点から、これらの史料をもう一度、再検討することにより、報徳運動が地域社会の産業発展にどのような貢献をしたのかという問題が解明されることになるであろうし、「実学」の応用としての「実業」がいったいどのようなもので

あり、「実業」を支えた「実学」とははたして何であったのかという問いの答も、やがて見つかることになるのではないかと思う。

このように、報徳運動に「実業」という観点から新たな光を当てることが、日本の産業革命期の村の「実学」を明らかにすることにほかならない。村の「実学」が、村に生きた人々の生活の向上や村の発展に、いったいどのように貢献したのかという問題を解明することは、「実学」および「洋学」が近代の日本社会で果たした役割を考察するうえで、きわめて重要な作業であると考えられる。

今後の「実学」および「洋学」研究のさらなる発展のために、本稿が一つのささやかな問題提起となれば幸いである。

謝辞

本稿は、実学資料研究会2004年度大会（洋学史学会合同例会）（2004年3月28日、静岡県総合教育センター）における研究発表によるものである。当日ご教示をいただいた皆様に感謝を申し上げます。

脚注

- 1) たとえば、望月誠『家政抄論』（明治13=1880年）「農工商等の業にして専ら手足を労働すの職業を斥す」（下線は引用者、以下同）、実業学校令（明治32年=1899年）第一条「実業学校ハ工業農業商業等ノ実業ニ従事スル者ニ須要ナル教育ヲ為スヲ以テ目的トス」など（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典（第2版）』第6巻〔小学館、2001年〕824ページ）。
- 2) 久米邦武編『（特命全権大使）米欧回覧

実記』（明治11年刊行）第一編第六巻に「〔モルガン〕商学校ニ至ル、此学校ニテハ諸式ノ取引、帳簿の附控ヘヨリ（即記簿法）貨物運動ノ理ヲ教ユル所ナリ、進業ノ後ハ学費ノ内ヨリ財本百弗ヲアタヘテ、之ヲ実地ニ経験セシム、是ヨリ生業ニツキテ、家産ヲ興スモノモ多シトナリ、然トモ学知ハ経験ヲ経テ後チ始テ実業ヲ仕覚エルモノナレハ、往々実地ニ臨ミ、顛覆シテ財本ヲ失フニ至ルモノモアリ」とある（久米邦武編〔田中彰校注〕『（特命全権大使）米欧回覧実記』（一）〔岩波文庫、1977年〕145ページ）。

- 3) 「〔実業家〕なる概念は、実は頗る曖昧なものである」（土屋喬雄〔監修解説〕『（類聚 伝記大日本史 第十二巻）実業家篇』（雄山閣、1936年、1981年復刻）1ページ）。
- 4) 明治維新とは「19世紀後半、国内矛盾と世界資本主義の圧力が結びつくなかで、幕藩体制が崩壊し、近代天皇制国家が創出され、日本資本主義形成の起点となった政治的、経済的、社会的、文化的な一大変革を総称していう」（田中彰；『世界大百科事典』CD-ROM、日立デジタル平凡社）。
- 5) 藤森三男「福澤諭吉と「実業」の精神」（『三田商学研究』第32巻第5号、1989年12月）77ページ、83ページ。
- 6) 『実業論』の引用は、すべて小室正紀編『（福澤諭吉著作集 第6巻）民間経済録 実業論』（慶應義塾大学出版会、2003年）による。
- 7) 器械や電気など技術の発展が「実業」の発展につながることを示す顕著な例として、福澤の脳裏には『実業論』執筆2年前の明治24年（1891年）に京都蹴上に完成し

た世界第二番目の水力発電所が想起されていたと考えるのも、あながち誤りではあるまい。

- 8) 大日本実業学会要領。
- 9) 和辻哲郎『自叙傳の試み』(中央公論社, 1969年)。
- 10) 『実業之日本』「発刊の辞」明治30年6月(実業之日本社社史編纂委員会編『実業之日本社百年史』[実業之日本社, 1997年])。
- 11) 引用は服部禮次郎編『(福澤諭吉著作集第11巻) 福翁百話』(慶應義塾大学出版会, 2003年)による。
- 12) 内田魯庵『社会百面相』のうち「青年実業家」(明治35年)(藤本義一編『(日本の名随筆75) 商』[作品社, 1989年])。
- 13) 長幸男「実業思想の系譜」(『近代日本研究』第10巻[1993年]) 62, 64ページ。
- 14) 渋沢史料館編『常設展示図録 渋沢史料館』(渋沢史料館, 2000年) 58ページ。以下の引用はこれによる(展示シートにより修正補足)。
- 15) 武藤山治『実業読本』(日本評論社, 大正15年)。
- 16) 大畑哲編『続よみがえる群像—神奈川の民権家列伝—』(かなしんブックス)(神奈川新聞社, 1989年) 104~115ページ。
- 17) 国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第9巻(産業教育1)(国立教育研究所, 1973年) 52~53ページ。
- 18) 上村安太郎(手島精一)『実業補習教育論』(嵩山房, 1894年)(『(近代日本) 青年期教育叢書』第II期(青年学校論)第1巻[日本図書センター, 1991年]所収)。以下の引用はこれによる。
- 19) 「実業学校ハ工業農業商業等ノ実業ニ従

事スル者ニ須要ナル教育ヲ為スヲ以テ目的トス」(第一条)(前掲『日本近代教育百年史』第9巻, 68ページ)。

- 20) 長幸男編集・解説『(現代日本思想大系11) 実業の思想』(筑摩書房, 1964年) 43~44ページ, 報徳博物館「企業経営と報徳—尊徳に学んだ近代産業のリーダーたち—」(『報徳博物館館報』第3号[財団法人報徳福運社, 1987年]) 59~65ページ。
- 21) 小出孝三「二宮尊徳の思想—報徳社運動の理解のために—」(本位田祥男博士古稀記念論文集刊行会『西洋経済史・思想史研究』[創文社, 1962年]) 301ページ。
- 22) 大藤修『近世の村と生活文化—村落から生まれた知恵と報徳仕法—』(吉川弘文館, 2001年) 465ページ。
- 23) 中村雄二郎, 木村礎編『村落—報徳・地主制—日本近代の基底—』(明治大学社会科学研究所叢書)(東洋経済新報社, 1976年) 308~309ページ。
- 24) 海野福寿, 加藤隆編『殖産興業と報徳運動』(明治大学社会科学研究所叢書)(東洋経済新報社, 1978年) 237~238ページ。
- 25) 掛川市史編纂委員会編『掛川市史』資料編(近現代)(掛川市, 1995年) 1006~1007, 522ページおよび1005~1006, 21~22ページ。同編『掛川市史』下巻(掛川市, 1992年) 454~464ページ, 464~470ページ。
- 26) 勝部真人『明治農政と技術革新』(吉川弘文館, 2002年) 5, 122~125, 219~220ページ。
- 27) 「近代地方体制の研究」静岡県掛川地方研究班『(静岡県掛川市大日本報徳社所蔵) 岡田家文書目録』(文部省科学研究「総合

研究A」昭和45年度, 1970年)。

引用文献

すべて脚注に記載。

参考文献

- 1) 小松章「福澤諭吉の実業論」(『一橋論叢』第109巻第5号, 1993年5月)。
- 2) 小松章「渋沢榮一の実業思想—『青淵百話』にみる—」(『一橋論叢』第108巻第5号, 1992年11月)。
- 3) 坂本慎一『渋沢榮一—の経世済民思想』(日本経済評論社, 2002年)。
- 4) 惣郷正明・飛田良文編『明治のことは辞典』(東京堂出版, 1986年)。
- 5) 丸山眞男(松沢弘陽編)『福澤諭吉の哲学(他六篇)』(岩波文庫, 2001年)。
- 6) 読売新聞社メディア企画局データベース部編『明治の讀賣新聞』CD-ROM(読売新聞社, 1999年)。